

小・中学校の音楽科「創作（音楽づくり）」分野における指導と評価の工夫について

科学技術教育部 研究主事兼指導主事 浅井 ちとせ

要約

小学校において平成 23 年、中学校において平成 24 年に学習指導要領が全面実施となり、その趣旨が全国に周知され、授業実践が全国的に進む中で、音楽科においては、とりわけ「創作」の指導の改善と充実が課題となっている。「創作」分野は児童生徒の思考力・判断力・表現力等を高めることができる、まさに 21 世紀型学力を迫及できる分野でありながら、歌唱分野や器楽分野、鑑賞領域と比べて実践が進んでいないと考える。今年度、「創作」及び「音楽づくり」分野を扱った 2 つの音楽科の授業から、児童生徒の高いパフォーマンスを生む手立てと、共通する課題を見出し、研究テーマとして取り組んでみた。

2 つの授業を通して児童生徒のモチベーションを高める要因の分析を行い、「創作」分野の効果のある指導方法を考察したところ、共通して、少人数グループ形態での「創作」活動が組み込まれていた。この形態は創作のアイデアを深め合い、楽譜の書き方や楽器で表現する際の演奏方法等を確認め合う点で有効な方法であることが認められた。一方、設定された評価規準につながる個人での評価方法において課題があったため、グループ創作における個人評価につながる具体的方法について提案し、今後、提示した具体的手法について、当センターの小学校・中学校の音楽科「創作（音楽づくり）」講座、京都府小学校教育研究会音楽科研究協力校等に提示して、効果を検証したいと考えている。

キーワード：ねらいの焦点化 ねらいに沿った創作条件 ゴールイメージの明確さ
記譜スキルの定着の手立て

1 問題意識と目的

小学校において平成 23 年、中学校において平成 24 年に現行学習指導要領が全面実施となり、その趣旨が全国に周知され、授業実践が全国的に進む中で、音楽科においては、とりわけ「創作」の指導の改善と充実が課題となっている。音楽科においては、「技能」重視の従前の指導要領から、過程を大切に「思考力・判断力・表現力」等を高める指導が重視されている。小学校学習指導要領の音楽科改訂の要点では「音楽づくり」において、「音を音楽に構成する過程を大切にし、〔共通事項〕に示す音楽の仕組みを手掛かりにして、児童が思いや意図をもって音楽をつくるようにすることの重要性を示した。」と示されている。

平成 16・17 年度文部科学省委嘱調査「義務教育に関する意識調査」報告書（2005）によると、次の記載がある。

小学校第 4～6 学年	音楽の授業がとても好き・まあまあ好き
	男子 51.1% 女子 80.7%
中学校第 1～3 学年	音楽の授業がとても好き・まあまあ好き
	男子 37.6% 女子 65.6%

季刊「音楽鑑賞教育 Vol.19」（2014.10）の文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官 津田正行氏による特別寄稿では、この報告書を基に、「小・中学校とも、約3割の男女差がある。一般に音楽に苦手意識を感じるのは男子が多い。音楽づくり／創作に熱心に取り組んでいる教育課程研究指定校などからは、音楽が苦手な子ども、特に男子が音楽づくりの学習に熱心に取り組んでいるという声を聴く。音楽づくり／創作の充実は、ジェンダーバイアスの解消にもつながっていく可能性を含んでいる。」と記述されている。

苦手な子どもの意識向上が期待できる「創作」分野であるが、一方では、実践報告例が少ないという現状がある。この原因として考えられることは、創った音楽を書き留める手段である音符や休符の記譜スキルの定着が難しいことが一つの要因であると考えられる。

低学年で生き生きと「音楽づくり」に取り組む児童が、年齢が上がるにつれて意欲をなくすという実態と、「創作」を扱った2つの授業から、高いパフォーマンスを生む手立てと、共通する課題を見出したことが、本テーマを設定する契機となった。

2 研究の目的

音楽科の課題である「創作」の指導及び評価について、二つの授業を分析し、当センターでの音楽科研修講座等を通して、学校現場の先生方が活用できる「創作」の授業の効果的な指導方法やグループ活動における個人評価の手立ての具体例を提示する。

3 分析する授業

A 小学校の3年生を対象とした「音楽づくり」の研究授業

B 中学校の3年生を対象とした「創作」の研究授業

4 授業の分析

4.1. A 小学校の高い創作パフォーマンスを生み出す授業展開と児童の活動の分析

(1) 伝統芸能の教材化

A 小学校の校区から東へ数キロ入った山間部の町に伝わる伝統芸能を教材化して「創作」活動につなげ、地域の伝統文化の理解を深めた。

(2) 鑑賞と表現を関連させた題材の工夫

伝統芸能のビデオ鑑賞の後に、同曲の歌唱や器楽活動を通して、太鼓のリズムを使った「旋律づくり」に生かした。

(3) 題材計画の各時間のねらいの焦点化

(4) ねらいに沿った創作条件（日本音階とリズム）の設定の適切さ

(5) 指導計画の順次性と系統性

(6) グループで協力して創作する楽しさの感受

(7) 創作発表時の適正な役割分担

リズムパート（締太鼓）の担当1人と旋律パート（リコーダー担当2人）

(8) 細かな教具による手立ての工夫

① 常時活動での ICT を用いたソルフェージュ

教師は8ビートの拍節的なリズムを電子音源から流しながら、電子黒板に旋律楽譜やリズム譜をパソコンからプレゼンテーションソフトで提示する。児童は、

拍節的なビートのリズムに乗りながら、電子黒板に提示される旋律やリズム譜をすばやく表現し、さらに、p や f、crescendo などの強弱記号やスタッカート、テヌートなどの音楽記号の示す表現で歌ったり、手をたたいたりしていた。表現活動は体全体を使って表現し、音が上がっていく時は手を大きく上に挙げながら、リトミック風に歌っていた。（歌い方も頭声発声で響く声で歌っており、歌唱の基礎的な技能が定着していた）

これらの常時活動が、記譜スキル定着の基礎となっていることが認められた。

② 共同学習に適切な書き込みボード活用

五線紙を透明シートの下にはさみ、3人が双方向からマジックで書き込むことができるボードを使用し、創作時の話し合い活動に生かしている。

③ リコーダー指番号シール

授業の担当教師が、自分が音楽を担当するすべての児童のリコーダーに、指番号シールを貼る。（番号シールの位置をホール横に正確に貼るため）

④ 打楽器パート用の練習用パッド

⑤ グループ活動に適した背もたれのない低くて広い椅子（楽譜を書く際はすぐに机に変化）

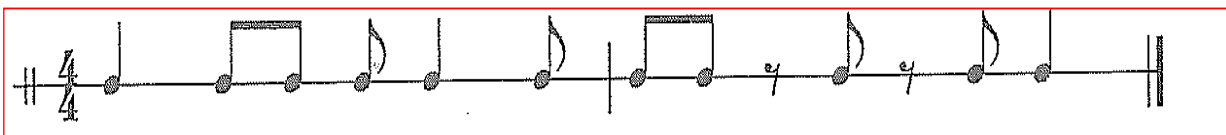
(9) 創作でねらうゴールイメージの明確さ

4.2. B 中学校の生徒の「創作」モチベーションの分析

(1) 生徒に身近なフレーズを楽しく音符に記す常時活動

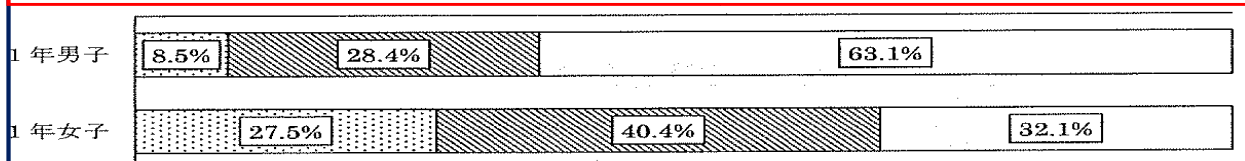
B 中学校の授業の後の研究会で、B 中学校を含む地域の中学生を対象に実施されたアンケート結果が報告された。

「下の音符を見てリズムがわかりますか」という問いに対して、中学1年の男子で「わかる」と答えた割合が 10.7%、1年女子においても 36.8%という結果であった。



「下の音符を見て、すぐに歌えますかリズムがわかりますか」という問いに対して、中学1年の男子「歌える」と答えた割合が 8.5%、中学1年の女子「歌える」と答えた割合 27.5%であった。/

下の音符を見て、すぐに歌えますか？
1つ選んで、数字に○をしてください。



※左から順に「歌える」「少し歌える」「歌えない」

これらの結果に鑑み、指導者は常時活動として、授業導入時に身近なフレーズを生徒自ら音を探してリコーダーで吹いてから音符に置き換える活動を続けている。成果として、研究授業の中でほとんどの生徒が表したい音を楽譜に置き換えるスキルが認められた。記譜スキルを付けるためのリズム打ちやソルフェージュ、聴音などの活動を常時活動に、楽しく取り入れることが記譜力をのばすと考える。さらに研究授業において、生徒が創作モチベーションを高く保つ要因を考えた。

(2) スモールステップでの題材指導計画

グループごとに創作する「テーマ（イメージ）」決定の後に「リズムから旋律へ、旋律から形式・構成へ」のようなスモールステップで、1時間ごとにねらいを設定して、丁寧な指導計画が作成されていた。

(3) 創作条件を限定する効果

構成音をド～ソの5音に限定し、一部形式か三部形式で創作する条件を与えた。（条件の効果）

- ・アルトリコーダーの運指が容易である。
- ・リズム・速度・強弱・旋律などの音楽を特徴付けている要素を焦点化して指導することができる。

5 2つの研究授業に共通する課題

共通して少人数グループ形態での「創作」であった。グループ「創作」はアイデアを深め合い、楽譜の書き方や表現方法を確認め合う点で有効な形態であることが認められた。しかし、設定された評価規準につながる個人での評価方法において課題を感じた。この課題に対し、グループ創作における個人評価につながる具体的方法を提示する必要がある。

6 「箏」を使ったグループ創作における個人評価シートの提案

- 創作条件：構成音を二三四五六七八弦に限定して、テーマ「春の訪れ」を箏の「コーロリン」の奏法を用いて、4人で創作し、箏で表現する。
※コーロリン…隣接する3本の弦を高い方から低い方へ順番に下降する旋律を奏する奏法。
リズムは付点8分音符、16分音符、4分音符で3音を続けるリズムに近い。
- ねらい：口唱歌「コーロリン」を使って「春の訪れ」を平調子で創作しよう。
- 評価規準例：「コーロリン」のリズムのおもしろさを感じ、どのようにテーマ表現に生かすか意図を持っている。
- 予想される効果：4人グループによる箏を使った創作活動において、最初は2小節ずつ分担して個人創作し、創作意図をワークシートに記入する。その後の話し合い活動で、ねらいにふさわしい旋律に切り変える過程を書き込むことにより個人の評価につなげることができる。
- 和楽器の記譜の効果：和楽器を用いた創作では、我が国の伝統的な口唱歌を用いると記譜が易しく、西洋式の記譜に苦手意識を持つ生徒が取り組みやすいので、創作意欲が高まる効果が期待できる。

<創作シート例>

創作テーマ： 「春の訪れ」			
④	③	ニ ②	七 ①
			六
		三	五
		四	五
		五	○
		七	五
		六	四
		五	三
		五	三
		○	○

担当： (④) (③) (②) (①)

(個人アイデア評価シート)

♪「コーロリン」を使ってテーマを表現するアイデアを書きましょう。

♪記入例：①春先の寒さを下降する旋律で表し、春のときめきを「コーロリン」のリズムで表した。

② ①のコーロリンの下降旋律を受けて3小節目は一音ずつ上行して、草花が一斉に芽吹く様子を表し、4小節目は小楽節の終わりの部分ととらえて冒頭の旋律を再び用いた。

(グループ創作の過程評価シート)

♪話し合いの結果どのように旋律を変化させたかを書きましょう

♪記入例：①冒頭は春の到来を待つ気持ちの高まりを表すために上行旋律の方が良いという意見にまとまり、コーロリンを使用せず2弦から8弦まで一音ずつ上行旋律に変化させる。

②春の芽吹きを表すため3小節目で七六五のコーロリンを二回用いて動きを付け、四小節目は五四三のコーロリンを用いて小楽節が終わる感じにする。

7 考察

音楽科において創作指導が課題となっている中、2つの授業で児童生徒が生き生きと創作活動する姿を見て、音楽科での受動的な学びから能動的な学習への可能性を感じることができた。

この能動的な学習のためには、選んだ音を組み合わせることで創作したモチーフやフレーズを音符として残したいから記譜を学びたいという意識が芽生えるような、楽しい常時活動を工夫することが必要であると考えた。

グループ創作の課題である個人評価の方法として、指導者がゴールイメージを持つことを前提に、最初に個人での創作をさせて創作意図や過程を個別にシートに書き残し、さらにグループで話し合った経過を書き残すシートがあれば、グループ活動でも個人評価につながると思う。また、作品完成までの形成的評価として、グループ作品を創作途中で発表し、工夫点を学び合って、互いの作品の優れた点を自作品に取り入れる過程をシートに残すと、さらに質の高い作品が生まれる。

今後、京都府総合教育センターでの「音楽づくり」講座や「創作」講座、音楽科出前講座等において、創作の効果的な指導方法と評価方法を提示し、創作の授業による児童生徒の変容や音楽科授業における効果を検証したいと考えている。

参考文献

- 小学校学習指導要領解説 音楽編 文部科学省（2008）（教育芸術社 発行）
平成16・17年度文部科学省委嘱調査「義務教育に関する意識調査」報告書（2005）
季刊 音楽鑑賞教育 Vol.19 特別寄稿「音楽科における授業改善の現状と課題
Ⅱ－音楽づくり／創作を中心に－」津田正行（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）（2014.10）（公益財団法人 音楽鑑賞振興財団 発行）